茨城大学全学教職センター研究論集(2023),98-107

定時制高校の「総合的な探究の時間」を通した道徳教育の学習指導に関する研究

―― 生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を目指して ――

志 賀 栄 文*・小 川 哲 哉**

(2024 年 3 月 6 日受理)

Study of the Learning Instruction for Moral Education by using "Period for Inquiry-Based Cross-Disciplinary Study" in Part-time High School

―― Aim for Realization of Active Learning for the high school students ――

Hidefumi SHIGA and Tetsuya OGAWA

キーワード:道徳, 定時制高校, 総合的な探究の時間, 主体的・対話的で深い学び, デザイン研究

高等学校では、全日制課程だけではなく定時制課程の生徒にも、探究活動を通して自分自身の疑問や社会における課題を発見し、それらを解決するための課題解決型の学習を実施し、主体的・対話的で深い学びにつながる学習活動が求められている。茨城県では平成 19 年から、全ての県立高等学校1年次に「総合的な学習の時間」を使った「道徳」を実施してきた。このような道徳教育は、高等学校の現行の学習指導要領(平成 30 年告示)の改訂でも受け継がれ、「総合的な探究の時間」を中核とした教育活動においてもより一層の充実が図られることが求められている。ここでは定時制 A 高校の特色ある「総合的な探究の時間」の教育実践を検証することで、協働して取り組む活動を発展的に繰り返すことで、生徒の主体的・対話的で深い学びが実現され、地域や社会でよりよく生きていく力を育成する道徳教育の可能性について論究する。

問題の所在

現行の高等学校学習指導要領では、道徳教育の一つの方法として「総合的な探究の時間」の特質を生かし、探究学習の手法を使いながら、自らの見方・考え方を深めて横断的・総合的な学習を行うことで、自己の在り方生き方を考えるだけでなく、人間としての在り方生き方を学ぶ道徳教育の可能性が指摘されている[1)]。そのような道徳教育が求められているのは、今日のようなグローバル

*茨城県立日立工業高等学校　**茨城大学全学教職センター

化の急速な進展、技術革新の飛躍的な進化、さらには今般のコロナ禍という未曾有の事態が起こったことで、予測不可能な時代の中で、自ら課題を発見し、解決していくための資質・能力が重視されているからである。そのためには、「総合的な探究の時間」の目標である「自己の在り方生き方」の探究学習をさらに発展させて、「人間としての在り方生き方」を探究していく粘り強い学習活動を行う必要がある。

あらためて「高等学校学習指導要領解説総合的な探究の時間編」(平成30年７月)を見ていくと、「各教科・科目や特別活動の見方・考え方を、探究の過程において、適宜必要に応じて総合的・統合的に活用」するとともに、「総合的な探究の時間に固有な見方・考え方を働かせること」、各教科・科目と特別活動を往還し「深い学び」を実現することが指摘されているが[2)]、このような探究学習の成果については、全日制高校の事例研究の紹介は散見されるが、定時制高校における実践事例に特化した研究については極めて少ないのが現状である[3)]。そのため、本研究では定時制高校で総合的な探究の時間を通して道徳教育を実践している事例のある茨城県の定時制A高校を取り上げたい。

茨城県では令和３年度から、定時制高校における「総合的な探究の時間」について、研究協力校の授業改善の実態を把握し、成果と課題、今後の方向性等が整理されてきた。特に令和３年度には、研究協力校の「総合的な探究の時間」の実践事例及び課題等について調査が行われ、その結果として、探究学習の準備にあたっての教員間の共通理解の難しさや生徒の個性の多様化等が原因となり、なかなか「生徒の主体的・対話的で深い学び」に至っていない現状があること、定時制ならではの背景や課題があることが分かった[4)]。さらに令和４年度は、各校の令和３年度までの課題をどのように解決していこうとしたのかという視点から更なる取り組みの調査がなされた。その結果、本研究の仮説でもある「協働して取り組む活動を発展的に繰り返すことで、生徒の主体的・対話的で深い学びが実現され、地域や社会でよりよく生きていく力の育成につなげる」ことが重要な教育課題になっており、そのための授業改善が必要であることが明らかになった。

その際に注目したいのは、教育現場における授業改善研究を「デザイン研究」の側面から捉えることである。デザイン研究とは、1990年代から多くの研究者による提案、実践が行われてきた実践研究の一つである。本研究において特に注目したいのは、実践した授業をどのように分析し、解釈するかであり、それはいわば教育研究をデザイン科学として成立させるため、「学習デザインに学習研究のこれまでの知見が十分に反映され、さらに実践に展開することから学習のデザイン原則を明らかにしていく」アプローチである[5)]。さらに、学習環境の形成をめざしたデザイン研究の重要性は、大島が指摘しているように、「基礎的な研究の知見にもとづいて授業実践を計画、実践してその評価にもとづいて修正を繰り返すというPlan、DO、Check、Actionというサイクルを継続的に展開しながら、実践を向上させ続けると同時にそこから教授学的な原則の誤りを正し、精緻化していくこと」である[6)]。したがって本研究では、「デザイン研究のアプローチ」の立場に立ち、その手法の中で、授業実践を計画、実践、評価し、良い指導方法を探究し、授業改善の取り組みを論究する。

以下定時制A高校の実践事例を紹介してみよう。

授業実践及び考察

１　全日併置定時制Ａ高校の「総合的な探究の時間」を通した道徳教育の実践概要と課題

（１）実践概要

本事例校は全日制・定時制の併置校であり、定時制課程は単位制総合学科の教育課程である。総合学科は、普通教育及び専門教育を選択履修することを旨として総合的に施す学科であり、生徒の個性化・多様化に伴うニーズに応えるため、平成 24 年度から、従前の定時制機械科を定時制総合学科に改編した。２年次からは生徒の希望により、普通系列と工業系列のいずれかのカリキュラムを選択履修することになっている。現在、本校の「総合的な探究の時間」は、１年次に「総合的な探究の時間・『道徳』」を１単位履修し、３年次には共通履修科目として本校独自に設定した「課題研究」を普通系列、工業系列ともに２単位履修する教育課程となっている。

ア　総合的な探究の時間・「道徳」における実践例

①道徳テキスト「ともに歩む」（茨城県教育委員会発行）の題材を通した探究活動

②ゲストティーチャーの講話から自己の在り方生き方に関する探究活動

③自己の進路に関する課題（企業が求める人材を考えるなど）に関する探究活動

イ　課題研究における実践例（生徒が設定した課題の例）

①資格取得（秘書検定、パソコン検定等）

②パソコン操作（文書作成、表計算、プレゼンテーション、プログラミング等）

③木材加工（表札や椅子、フラワースタンド、小物入れの設計、工作等）

④金属加工（燻製機、たき火グリル製作、旋盤によるボールペンの製作等）

⑤製品製作（小型ラジオ製作等）

⑥自己の興味・関心に係る探究（自動車の構造に関する研究、猫に関する研究等）

（２）課題

・単に過去の例に基づいて授業を進めていたり、教員によってその取り組み方、工夫の仕方に温度差があったりするため、「総合的な探究の時間」の趣旨・目的、授業の進め方等の研修を改めて行う必要がある。

・探究活動の意義を生徒が理解した上で主体的に探究活動を行い、目指す資質・能力を身に付けるためには、自己の探究活動とそこから結び付く将来像を生徒自身がしっかり見通せるよう、目指す資質・能力を教員が明示したり、探究活動を通して学んだことを振り返り、自覚する機会を設けたりする等、より一層支援していく必要がある。

・総合的な探究の時間は、横断的・総合的な学習を行うという趣旨であることから、他教科との関連に加え、情報活用能力や言語能力、考えるための技法（比較・分類・関連づけ等）の育成、学習の基盤となる資質・能力の育成を、教員がより一層意識して取り組む必要がある。

（３）課題解決に向けた取り組み

総合的な探究の時間をその趣旨・目的に沿って充実を図るためには、担当教員の資質向上が必須である。教員全体での共通理解と教科・科目指導の中での探究活動にも波及させるため、学習指導要領に総合的な探究の時間が設定された経緯や重要性を教員が認識し、授業の進め方等の理解を一層深めるような研修が必要である。

また、「道徳」については、学習指導要領の総合的な探究の時間の位置づけから「公共」や特別活動を中核として学校教育活動全体で取り組むような方向性になったため、次年度からの総合的な探究の時間の在り方について改めて考える機会を設ける必要があり、本校において定める「目標」や「内容」を再確認してもらうためにも、課題解決に向けた取り組みとして、図１の校内研修資料「『総合的な探究の時間』についての理解の深化」に基づいて校内研修を実施した。

R4. 11. 17 校内研修

「総合的な探究の時間」についての理解の深化

１　総合的な探究の時間の重要性

「総合的な探究の時間は、変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標にしていることから、これからの時代においてますます重要な役割を果たすものである。」（文科省ＨＰ）

〈参考：21 世紀型スキル〉

21 世紀型スキルは、これからの時代に必要なスキルを、４つのカテゴリ、10 のスキルで示したもので、「ACT21s プロジェクト（アメリカ教育省、マイクロソフトなどの ICT 企業、大学研究者らによる団体）」がまとめたもの

21 世紀型スキル

思考の方法	⑴創造力とイノベーション　⑵批判的思考、問題解決、意思決定 ⑶学ぶことの学習、メタ認知（認知プロセスについての知識）
仕事の方法	⑷コミュニケーション　⑸コラボレーション
仕事のツール	⑹情報リテラシー　⑺ICT リテラシー
社会生活	⑻市民性（ローカルとグローバル）　⑼キャリア設計 ⑽個人的、社会的責任（文化についての理解と適応）

２　「探究のプロセス」

①課題の設定　→　②情報の収集　→　③整理・分析　→　④まとめ・表現

３　総合的な探究の時間の課題（学習指導要領解説より）

・探究のプロセスの中でも「整理・分析」、「まとめ・表現」に対する取組が十分ではない。（探究のプロセスを通じた一人一人の資質・能力の向上をより一層意識することが求められる。）

・小・中学校の取組の成果の上に高等学校にふさわしい実践が十分展開されているとは言えない。

４　総合的な探究の時間の特質（学習指導要領解説より）

⑴　質の高い探究

①　探究の過程の高度化

・探究において目的と解決の方法に矛盾がない（整合性）

・探究において適切に資質・能力を活用している（効果性）

・焦点化し深く掘り下げて探究している（鋭角性）

・幅広い可能性を視野に入れながら探究している（広角性）

②　自律的な探究

・自分にとって関わりが深い課題（自己課題）

・探究の過程を見通しつつ、自分の力で進められる（運用）

・得られた知見を生かして社会に参画しようとする（社会参画）

⑵　他教科・科目における探究との違いを踏まえる

①　横断的・総合的な領域（実社会や実生活に存在する事象）を学習の対象とする

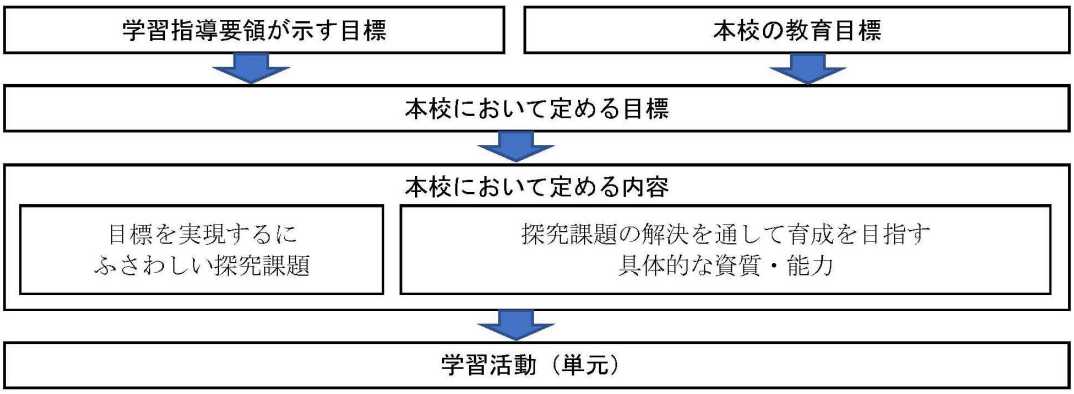
②　複数の教科・科目における見方・考え方を総合的・統合的に働かせて探究する

③　解決の道筋がすぐには明らかにならない課題や唯一の正解が存在しない課題に対して、最適解や納得解を見いだすことを重視する

実社会や実生活における課題の探究 ＜総合的な探究の時間＞	各教科・科目で行われる 探究活動

教育課程上にしっかりと位置付ける

5　総合的な探究の時間の目標、内容及び学習活動の関係



学習指導要領が示す総合的な探究の時間の目標	本校の教育目標
探究の見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。 (1) 探究の過程において、課題の発見と解決に必要な知識及び技能を身につけ、課題に関わる概念を形成し、探究の意義や価値を理解するようにする。 (2) 実社会や実生活と自己との関わりから問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することができるようにする。 (3) 探究に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、新たなに活動するとともに、課題解決のために他者を尊重しながら協働しようとする姿勢を身につけるとともに、地域の産業に貢献しようとする態度を養う。	新しい時代を主体的・創造的に生き、他者と協働して様々な課題に挑戦できる、起業家精神をもった、未来をつくる人財を育成する。

本校の総合的な探究の時間の目標

地域社会との関わりを重視した探究活動を通して、人としての感性と確かな力を育み、知・徳・体のバランスが取れた地域の産業に貢献できる人材となるための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 地域社会に関わる探究活動を主体的に行うことによって、課題の発見とその解決に必要な知識及び基本的な技術・技能を身につけるようにする。(知識及び技能)

(2) 地域社会と自己との関わりから課題を発見し、情報収集・整理・分析し表現することによって、産業技術者としての創造性や豊かな感性を養う。(思考力、判断力、表現力等)

(3) 地域社会に関わる探究課題について主体的に活動するとともに、課題解決のために他者を尊重しながら協働しようとする姿勢を身につけるとともに、地域の産業に貢献しようとする態度を養う。(学びに向かう力、人間性等)

1年次（1単位） **「総合的な探究の時間」** 〈探究課題〉 ・〔要検討〕	道徳は、令和５年度から公共や特別活動を中心として学校教育活動全体で取り組むこととなったため、総合的な探究の時間での「道徳」の内容設定が任意となった。→ 探究課題と内容を今年度中に再考する必要がある。
3年次（2単位） **「日工課題研究」** 〈探究課題〉 ・職業や自己の進路に関する課題 ・地域の産業（ものづくり）に関する課題 ・生徒の興味・関心に基づく課題	〈目指す資質・能力〉 (1) 地域産業と自己との関わりから課題を発見し、その解決に必要な知識及び技能を身につけ、探究することの意義・価値を理解する。(知識及び技能) (2) 課題について多方面から情報収集を行い、課題解決のための手法を模索し、その過程や結果について様々な方法で表現することができるようにする。(思考力、判断力、表現力等) (3) 探究活動を通して社会の一員としての自覚を持ち、自己有用感や将来に対する展望を持てるようにする。(学びに向かう力、人間性等)

※探究課題の設定：「例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域や学校の特色に応じた課題、生徒の興味関心に基づく課題、職業や自己の進路に関する課題などを踏まえて設定すること。」(学習指導要領)

図１．校内研修資料「『総合的な探究の時間』についての理解の深化」、R4.11.17 実施

（4）仮説の検証

令和４年 11 月 17 日に、本校会議室にて「『総合的な探究の時間』についての理解の深化」という内容で校内研修会を実施し、そこに参加した 12 名の教員に意識調査を２件法（はい、いいえ）で行った。意識調査した質問項目は次の３つである。

①総合的な探究の時間が設定された経緯や重要性を教員が認識できたか。

②授業の進め方などの理解を一層深めることができたか。

③本校において定める「目標」や「内容」を理解することができたか。

結果と考察

① 「はい」11 人、「いいえ」１人　92%が「はい」と回答

② 「はい」10 人、「いいえ」２人　83%が「はい」と回答

③ 「はい」12 人　100%が「はい」と回答

上記の結果、意識調査の各項目について、８割以上の教員が「はい」と答えた。自由記述からは、「改めて『総合的な探究の時間』についての学習指導要領に基づく、指導内容や目標が理解できた」、「これまでの指導計画や指導内容を見直すきっかけとしたい」など、校内研修を実施したことで、教員の総合的な探究の時間に関する自己内省が深まり、今後の授業の工夫改善が期待される。

２　フレックススクールＢ高校の「道徳」・「総合的な探究の時間」の実践概要と課題

（1）実践概要

家庭や学校における人間関係等で学校生活を苦戦してきた生徒が多い本事例校は、再度各教科を学び直す場として、また社会で生活をおくることができる資質や能力を身に付ける場であることが期待された教育活動が営まれている。生徒の実態にあった資質・能力を身に付けるため、「自己理解から始まる職業の選択と社会貢献及び自己実現」を探究課題とし、１年次では「自己理解・他者理解・『道徳』（心豊かな人間形成）」、２年次では「私の未来考察（自己理解から他者理解へ）」、３年次では「社会を生き抜く力の育て方（進路実現）」を目指してきた。

（2）課題

ここでは令和３年度の実践例における課題に示したが、「総合的な探究の時間」は、クラスや年次や各部（午前部・午後部・夜間部）のそれぞれの裁量で連携されずに、生徒主体の連続性や関連性を理解した活動とは言えず、教員主導の体験的活動として行われていることが多い。本来「総合的な探究の時間」を通して、自校ではどんな資質や能力を伸ばしていくのかを確認し、教員間で共有すること、さらに各行事や教科との連携を深め「総合的な探究の時間」を準備していくことで、その成果が一層充実した内容として生徒の主体的活動が望める。また、コロナ禍によって協働的な学習や外部の人材を活用した時間が制限されていたのが現状である。

（3）課題解決に向けた取り組み

令和４年度以降は、「総合的な探究の時間」について RPDCA を回す部署を１つの校務分掌（進路指導部）に位置付け、「総合的な探究の時間」のグランドデザインをもとに内容や指導方法等を提示し

た。今年度から課題解決のためにその提示を学校全体で共有し、計画的に実践することを目指した。そして本校の探究課題である「自己理解・他者理解」を高め、「職業の選択と社会貢献及び自己実現」するために自己の活動を振り返りながら他者と協働して取り組む活動を発展的に繰り返すことや外部の人材を有効に活用していくことを実践した。

ア　全年次の共通内容

○自分の考えや行動等に対して振り返りの場を多く持たせ、自己理解や他者理解を深める。

・高校生活における目標設定と修正　　・定期考査、適性検査等とその振り返り

・学校行事や講話等への参加とその振り返り　　・生活体験発表原稿作成と振り返り

○コミュニケーション能力を高める。

・アイスブレイクゲーム　　・コミュニケーションゲーム

イ　各年次の主な内容

○１年次（探究課題：探究の手法を学ぶ→自己理解）

・図書館や ICT を活用した情報収集の仕方と探究活動の理解

・ポートフォリオ、キャリア・パスポートの意味を学ぶ

・ハートウォーミング、グループワーク　※前年度掲載

○２年次（探究課題：自己理解→他者と関わりを踏まえた職業選択と社会貢献）

・各学校行事における自己の役割と課題設定、課題解決

・進路適性検査の分析　　・進路別見学会と振り返り

○３、４年次（探究課題：進路実現→社会人に向けて）

・進路ガイダンスと振り返り　　・面接練習と振り返り

・18 歳消費者生活講座と振り返り　　・社会人マナー講座と振り返り

・「社会保険と労働のルール」の講座と振り返り　　・「年金セミナー」と振り返り

・ソーシャルスキルトレーニング、認知作業、認知機能強化、認知ソーシャルトレーニング

ウ　方法

・ポートフォリオやキャリア・パスポートを活用することによって自分の考えや行動を振り返らせることを習慣づけ、課題を見つける。(写真①)

・図書館や ICT を活用することによって自分の考えをより深いものとし、また他者の考えを知ることで自分の考えを修正することを意識させる。(写真②)

・コミュニケーション能力を高めていくことも含め、随時グループワーク、レクリエーションやゲーム、スキルトレーニング等を取り入れる。(写真③)

・多くの他者と協働して取り組めるように年次、各部（午前部・午後部・夜間部）等を合同にした形式を年に数回取り入れる。(写真②・④)

・進路実現に関してはハローワーク、市役所、年金事務所、消費生活センター職員、社会保険労務士等、外部の専門機関や人材を活用する。(写真④)

写真①:振り返りの習慣づけと課題発見

写真②:図書館や ICT 活用

写真③:グループワーク

写真④:外部講師による金融教育

（4）仮説の検証

探究課題である「自己理解から始まる職業の選択と社会貢献及び自己実現」を解決するために自身の活動を振り返り、課題を発見し、それを解決するためにＩＣＴや図書館を活用しながらクラスを越えて年次や各部（午前部・午後部・夜間部）の生徒や外部の人材等多くの他者と協働して取り組む活動を発展的に繰り返すことで、生徒の主体的・対話的で深い学びが実現され、地域や社会でよりよく生きていく力、すなわち自己の在り方生き方、さらには人間としての在り方生き方を考えながら実社会や実生活の中でより良く課題を発見し、解決していく資質・能力の育成につながるであろう。

夜間部の生徒８人にアンケートをとったところ以下の結果が得られた。

・今年度の「総合的な探究の時間」に対して「積極的でなかった」と回答した生徒はいなかった。

・年次や各部（午前部・午後部・夜間部）の生徒の枠を越えた集団で活動することによって「コミュニケーション能力が身についた」と回答した生徒が７人、「自分のことを知る機会になった」と回答した生徒が８人、「ほかの人を知る機会になった」と回答した生徒が７人だった。これら３項目とも８割以上が肯定的な回答をしていた。

・夜間部の１年次から４年次合同での活動について「他のクラスの人ともコミュニケーションがとれるので物事が円滑に進められた。」「後輩との貴重なコミュニケーションの時間をとれて良かった。昨年より年次の壁が少なくなった。」「下の年次の子たちと会話し仲良くなり、後輩たちも自分の意見をしっかり言えたことに対して嬉しい気持ちもありながら驚きもすごかった。」等の感想があった。また「自分はもともと消極的な性格なので、後輩たちにどう思われているか気になった。」といった感想もあった。

・進路に対する活動に関しては、全員が「自分の進路や生活について考える機会になった」と回答した。

・他の各部と合同で進路活動をすることによって「夜間部の生徒とはまた違った人たちが多いのでとても良い機会になった。」「午後部の生徒とは関わりがなかったですが、面接練習の時、同じチームになったり、少し話させてもらったりするなど自分のためにすごく役立った。」等の感想があった。また「集団でやる面接練習は辛かった。大勢の前の面接がすごく嫌だった。」といった感想もあった。

以上のアンケート結果から、探究活動において課題を発見し、それを解決するために、自分一人ではなく、特に他者とかかわること、他者と協働で取り組むことによって、本校生徒は自分や他者を理解しながら、主体的・対話的な学びのある有意義な時間を過ごせたといえる。しかしながらその活動そのものが発展的であったか、果たして多くの生徒にとって深い学びになったかどうか、地域や社会でよりよく生きていく力の育成につながったかの確認までは至っていない。

今後も進路指導部を中心に定期的に研修会等を実施し、「総合的な探究の時間」について R-PDCA サイクルをまわしながら、本校生徒の目指す姿である、社会人として求められる基礎学力を身に付け、自己の将来を見据えた進路を実現し、豊かな人間性を備えた社会人の育成を実現していきたい。

３　考察

まず一つ目の教員向け総合的な探究の時間の研修は、学習指導要領が令和４年度から年次進行で実施されることに伴い、従来の「総合的な学習の時間」における「道徳」の実践から、新たな学習指導要領における「総合的な探究の時間」の位置づけを行いながら、自校において定める「目標」や「内容」を再確認してもらい、新たな課題解決と道徳教育に向けた取り組みを進める必要がある。さらに、「そもそも各教員が探究のプロセスについてしっかり認識した上で実施しているのか」、「課題設定に対してどのような工夫をしたらよいのか」といった諸課題を検証する必要もあるだろう。研修後の意識調査からもわかるように、研修の機会に対しては肯定的意見が多かった。我々教員が常に研修の機会を求め、その資質・能力を向上させることは重要であろう。

二つ目の定時制高校における他年次交流は、もともと定時制高校では限られた教育機会の中で直接生徒と接する時間が少ないため、現状では難しいと言わざるを得ない。しかし、どのようにすれば生徒が自ら学びに向かう力を多様な機会を介して高められるか、さらには生徒の興味、関心、自信、意欲の向上を、様々な教育機会を通じて実現できるかを常に追求する必要があるだろう。定時制高校では、他人とコミュニケーションをとることが苦手な生徒、主体的に行動することが苦手な生徒、人前で発言・発表することが苦手な生徒が多い。

ただアンケート結果からも分かるとおり、自分一人ではなく、特に他者と関わること、他者と協働で取り組むことにより、生徒は自分と他者を理解し、主体的・対話的な学びへ近づく有意義な機会であったことが窺える。自己肯定感や有用感を持ち、周囲と関わり、人とつながることの楽しさや喜びを味わうことができれば、自尊心を高めることにもつながるであろう。

これらの事例から、「総合的な探究の時間」における探究学習を通して、周囲や社会と協働することを発展的に繰り返すことで、徐々に生徒の主体的・対話的で深い学びが実現され、地域や社会でよりよく生きていく力の育成につながるものと考える。まずは小さな一歩ではあっても生徒一人一

人の自己を成長させるための探究学習が期待される。

おわりに

本研究では、「総合的な探究の時間」とその指導法に注目し、探究活動を通し生徒の主体的・対話的で深い学びをすすめて「自己の在り方生き方」の追求と、「人間としての在り方生き方」を深く考える道徳教育の可能性を論究した。ただ本来であれば授業改善の取り組みについては、様々な研究協力校における実践の進捗状況と、さらなる授業実践の展開まで検討すべきであるが、この点に関しては今後の課題としたい。今日高校教育は多様化しており、学校により置かれている状況も異なっている。そのため今後は様々な探究学習実践をできる限りカテゴリー化しながら、テーマの焦点化を図る必要もあるように思う。

（本論文では、「問題の所在」を小川哲哉が、「授業実践及び考察」「おわりに」を志賀栄文が執筆した。なお本研究は、科研の基盤研究（C）K21K02595「高校道徳における討議型授業の理論構築とオンライン学習の活用」（研究代表者：小川哲哉）の研究成果の一部である）

注

1) 文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）」(2018)，475.及び「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説　総則編」(2018)，28.
2) 文部科学省「高等学校学習指導要領（平成 30 年告示)解説　総合的な探究の時間編」(2018)，12-13.
3) 例えば，水野正朗「『総合的な探究の時間』における深い学びの動向」『東海学園大学教育研究紀要』第5号（2019)，86-95.　堀俊「求められる『総合的な探究の時間』への取り組み―教科横断的な取り組みとカリキュラム・マネージメントの実践例－」『神奈川大学心理・教育研究論集』第52号（2022)，161-171.等があるが、定時制高校に特化した本格的な研究は見られない。
4) 茨城県高等学校教育研究会定通部、茨城県高等学校定通教育振興会「茨城定通教育第69号（令和３年度)」（令和４年３月１日)，25-56.
5) 大島純「最近の学習研究の方法論とその結果」『教育システム情報学会誌』Vol.21 No.3(2004)，160.
6) 大島純「学習環境形成のデザイン実験」秋田喜代美編『はじめての質的研究法　教育・学習編』(東京図書,2007)，226.